

〈研究論文〉

# 「特別活動の評価」に関する課題と方法

——チェックリスト法の提案——

根 津 朋 実

## 「特別活動の評価」に関する課題と方法

### ——チェックリスト法の提案——

根津朋実

#### 0. 問題の所在と研究の目的

本稿<sup>①</sup>の目的は、特別活動の改善に資する評価方法を開発するために、児童生徒の成績評定とは異なるカリキュラム評価 (curriculum evaluation) の方法として、チェックリスト法 (checklist method) を提案することにある。

「特別活動の評価」という場合、明らかに異質な二つの意味が考えられる。ひとつは、児童生徒の成績をどうつけるかという、いわゆる「評定」(rating) に関する意味である。もうひとつは、当該活動のどこが良かったか、どこが改善点かといった、「具体的な個々の活動についての運営上の見直しや振り返り」(reflection) という意味である。

例として、「特別活動においては評価の困難性が従来から指摘されてきた」(林・井上2003: 79)、「特別活動の評価についての研究は、指導方法の研究に比べて遅れており、これまで十分とは言えない状況にあったといえる」(杉田2005: 58) という二つの記述を考えてみる。引用中の「評価」は、児童生徒の評定を指すのか、あるいは教職員による活動の見直しを指すのか、これらの引用文だけでは、あまり判然としない。このように「特別活動の評価」という表現は、その文言だけでは二つの異なる意味に解することができ、ややまぎらわしく思われる<sup>②</sup>。

加えて、これまで特別活動の評価を扱う際、「指導と評価の一体化」が言及されてきた (たとえば、杉田 2004: 32)。指導の結果を適切に評価し、次の指導へとつなげる作業は、もちろん必要である。しかし、「指導と評価の一体化」に

傾注しすぎると、児童生徒の評定がそのまま特別活動それ自体の評価とされるおそれがある。ある活動について、児童生徒の評定が申し分なく高かったからといって、その活動が全体的にみて良かったとは即断できない。その活動の遂行にともない、たとえば教職員が過労で続々と倒れたり、膨大な金銭的負担を生じたりしたら、その活動には無理があると言わざるを得ない。また、「指導と評価の一体化」を狭くとらえすぎると、当初は意図しなかった望外の出来事や、教師の意図とは別に学習者が習得する「隠れたカリキュラム」(hidden curriculum) 等を、結果的に見過ごしかねない (根津 1999)。さらに、当初の目標を十全に達成しても、その目標の遂行にともなって生ずる副次効果 (副作用, side effect) がその目標以上の害をなせば、現実的には問題がある。類例として、企業の生産性の向上と公害の発生との関係が挙げられよう。

上述の諸点に配慮しつつ、「特別活動の評価」を論じる際、カリキュラム評価研究の諸成果 (たとえば、安彦 1999, 田中・根津 2009) が参照に値すると考えられる。カリキュラム開発 (curriculum development) において重要な位置を占めるカリキュラム評価は、児童生徒の評定に終始せず、開発したカリキュラムそれ自体を評価する営為である。また、カリキュラム評価の一方法として、当初の目標にとらわれず、多面的に評価を実施する「ゴール・フリー評価」(goal-free evaluation) もある (Scriven 1972, 根津 2006)。これらの研究に依拠すれば、特別活動は教育的な「プログラム」の一種、ないし各学校が試行錯誤の末に開発した「製品」の一種とみなせる。この立場をとることにより、児

児童生徒の評定を旨とする立場とは別に、実践の結果に即した「特別活動のカリキュラム評価」を、新たに構想できるだろう。

そこで、本稿では次の手順および方法により、検討を進める。

まず、「特別活動の評価」に関する先行研究を概観する。具体的には、『日本特別活動学会紀要』所収の諸論文、および『初等教育資料』誌を主に参照する。膨大な実践記録の検討に着手する前に、「特別活動の評価」に関する基本的な議論について、国内の実践や研究の水準を示す専門学会誌の諸論考、および中央省庁による代表的な刊行物を、吟味しておく必要がある。

この検討結果を承け、「特別活動の評価」に関する目下の諸課題を指摘するとともに、これらの課題を克服するための方法として、カリキュラム評価研究の一成果である「チェックリスト法」(checklist method)を提起する。

最後に、特別活動に特化した評価の道具であるチェックリストを提案し、結論とする。

## 1. 「特別活動の評価」に関する先行研究の整理

### 1-1 『日本特別活動学会紀要』所収論文の検討

1993年に第1号(3月)、第2号(8月)が相次いで出版された『日本特別活動学会紀要』(以下、『紀要』と略する)は、査読付きの全国学会誌である。『紀要』は原則として年刊であり、2009年12月までに17号を数える。『紀要』には、特別活動に関する歴史・理論研究や行政の動向と合わせて、諸活動の効果検証を意図した実証的な研究、実践家による実践報告も含まれており、理論および実践の双方に目配りした編集が行われている。

『紀要』中、「特別活動の評価」に関連する記事を検索したところ、3件の文献を得た(滝 1996、林 2003、佐藤 2004)。以下、これを手がかりに、「特別活動の評価」がどう議論されてきたかを検討する。なお、創刊から第17号までの約200件におよぶ全記事中、3件という件数はやや少なく思われる。比較の例を挙げれば、「学校行事」は10件前後、「学級活動」は20件近くを、それぞれ見出せるからである。

まず、滝尚文は、2000件以上の小中高の「特別活動に関する研究報告等の文献(愛知県教育センター所蔵)」(滝前掲:91)を分類し、特別活動の実践上の問題点を次の通り指摘した。すなわち、「学校行事に対しては一定の基準を設けて評価を下す機能が設定されていないため、比較対象のないままに実績の把握が曖昧になっている」(同:102)、「教育活動の目標を達成していく上で重要な位置にあり大きな機能を持っているながら、その実績についての評価が曖昧になる」(同:103)と。本稿の関心から、次の点が注目される。すなわち、これらの引用中の「評価」は児童生徒の評定ではなく、「教育課程の実施状況を評価する立場」(同:102)からなされている、という点である。

続いて林尚示は、「特別活動の評価については以前からその困難性が指摘されてきたと同時に、生徒のよさや可能性を生かすために活動の成果だけではなく指導過程での生徒の『関心・意欲・態度』への注目の必要性も指摘されてきている」(林前掲:76)とし、1990年代以降の特別活動論に関する書籍等の内容を整理した。この整理により、評価方法に関連して、ソシオメトリック・テスト法、質問紙法、指導要録、観察法、面接法、ゲス・フー・テスト、Y-Gテスト、MPI、適性検査、学習者の活動の記録や日誌、感想文、教師の指導記録等が挙げられた(同:78-79)。これらの性格検査等の名称から、諸書籍等が測定を旨とする往時の教育心理学の影響を色濃く受けたこと、およびそのことに関連して、諸書籍等の叙述には「教師が児童生徒を評定する」という図式が暗黙のうちにあることを、それぞれ読み取れる。また、国立大学の附属中学校の報告書等を検討し、「評価方法については、必ずしも多くの国立大学附属学校で十分な検討がなされているとはいえないようである」(同:82)と述べた。林は「特別活動論の理論的検討では評価方法は着目度が高いにもかかわらず特別活動の実践的側面では評価方法は必ずしも十分に検討されていない」(同)としたが、むしろ当然の帰結と思われる。書籍等で示された測定を旨とする教育心理学的な評価方法

は教師の日常とはかけ離れており、広く実践されず、結果的に報告書等の記録に残りにくい、と考えられるからである。

「特別活動における教育評価」を主題に掲げた佐藤真は、林による先の指摘も参照しつつ、児童生徒の学習状況を評価するための実践的な評価方法として、ポートフォリオ評価法を検討した(佐藤前掲)。「現在の我が国における教育評価においては、これまでの数値化される量的な評価ばかりではなく質的な評価が重要視されてきており、とりわけ学校教育現場における特別活動の教育評価では質的な評価のための実践的な評価方法の開発が必要視されているといえよう」(同：34)という指摘は、測定中心の評価観から価値判断を重視する評価観への転換を指向するという点で、本稿の問題意識と通ずる。佐藤は「カリキュラム評価とは、教師が教育計画を評価することであり、ここでは評価主体は教師であり、評価対象は学校の教育計画である年間指導計画や単元計画、あるいは指導案等」(同：35)としたが、カリキュラム評価の方法は検討しなかった。というのも、「小論で検討する評価方法としてのポートフォリオ評価法においては、特別に教育評価と断らない限りにおいては(ママ)、評価とは学習評価を指すこととする」(同)と、同論文は「教師が児童生徒を評定する」という前述の図式を、意図的に採ったためである。

以上、「特別活動の評価」に関し『日本特別活動学会紀要』を検討したところ、おおよそ次の結果が得られた。すなわち、①数少ない論考は児童生徒の評定を主に扱う、②「教師が児童生徒を評定する」という図式が優勢である、③前記②に関連して、教育心理学的な測定手法がよく言及される、④具体的な評価方法の実践例に乏しい、と<sup>9)</sup>。

## 1-2 『初等教育資料』掲載記事の検討

文部科学省の教育課程課・幼児教育課の編集による『初等教育資料』には、特別活動の評価に関する記事が散見される。同誌は中央省庁の月刊広報誌として、全国の教育行政および各学

校に一定の影響力を有するため、ここでの検討にふさわしいと考えた。

論文記事検索データベース CiNii (ci.nii.ac.jp)によれば、約60年間にわたる『初等教育資料』の記事数は3000件を超える<sup>10)</sup>。このうち、「特別活動」「評価」の2語を標題にもつ記事は2000年以降の8件、うち3件は実践の報告だった。実践の報告を除いた5件は、『初等教育資料』誌上の「特別活動の評価」に関する記事の大半といえる<sup>11)</sup>。なお、2000年という時期は、1998(平成10)年告示の学習指導要領が全面实施される直前であり、翌2001年4月には指導要録の様式が改められた。

さて、「特別活動の評価」に直接関連する5件の諸記事を検討したところ、前項の結果とほぼ同様の傾向が見られた。以下、前項の①から④に対応させて述べる。

①数少ない論考は児童生徒の評定を主に扱う：本稿が目する5件の記事(杉田 2004, 2005, 宮川 2002, 2003, 2004)は、児童生徒の評定を主に扱った内容である。たとえば、「特別活動の評価においては、各内容ごと(ママ)の評価規準などに照らして、子供の実践状況を適切に評価することが大切である」(宮川 2002：40, 下線は引用者による)、「特別活動においては、子どもにも自信をもたせたり意欲を高めたりするために、一層、子どものよさや長所の伸長に努め、子ども一人一人の進歩の状況や可能性などを積極的に評価することが極めて重要である」(杉田 2005：62, 下線は引用者による)という引用に、児童生徒の評定を主に扱うという傾向が、顕著に認められる。

②「教師が児童生徒を評定する」という図式が優勢である：この例として、国立教育政策研究所教育課程研究センターからの「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(小学校)」(2002年2月)を紹介し、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」について評価規準に言及した記事(宮川 2003：58, 2004：55)があげられる。「関心・意欲・態度」等は、教師が児童を評価する際の観点に他ならない。関連して、教師が記入する

指導要録への言及(宮川 2003:61-62, 杉田 2005:58-60)や、『『教師の指導』の評価は『子どもの活動状況』によって判断し、その『子どもの活動状況』の評価結果を生かして、『教師の指導』を改善することに努めるということになる』(杉田 2004:32)といった引用にも、同様の傾向をうかがえる。対照的に、特別活動に関し、教師が学校の組織的運営を評価する点や、児童が特別活動の運営を評価する(授業評価の特別活動版)という点は、記載が見当たらなかった。

③前記②に関連して、教育心理学的な測定手法がよく言及される:前項の検討と同様、評価方法として、観察法・子どもの記録や作文などの活用(ガス・フー・テスト, 討議法など含む)・質問紙法(宮川 2002:40),あるいは(1)観察法(①逸話記録法, ②評定尺度法, ③チェックリストによる方法)・(2)質問紙法・(3)面接法(杉田 2005:63-64)が、それぞれ挙げられた。いずれも特別活動に特化した評価方法ではなく、教育心理学的な測定手法が大半を占めるとと思われる。評価方法として「教師相互の話し合い」を指摘する場合(宮川 2002:40)も、その方法は「各教師が子供の観察や指導記録を持ち寄って、子供の活動の実態を多方面から検討し合うことが望ましい」(同)とされ、児童を評価する際の補足的な手続きという意味合いが強い。

④具体的な評価方法の実践例に乏しい:本項の①で述べた通り、『初等教育資料』中、「特別活動」および「評価」を表題にもつ実践報告は、わずかに3件だった。うち1件は児童の自己評価に関するもので、本稿の関心とは異なるため、検討から除いた。残る2件は、学級活動・児童会活動の評価(中村 2002), およびクラブ活動・学校行事の評価(佐藤 2002)を扱った。これらは概説的な記事(宮川 2002)に続けて掲載されており、明らかに内容は共通する。すなわち、「関心・意欲・態度」等の評価規準を教師が設定し、教師が児童の活動・記録(自己評価を含む)をもとに児童を評価する、という一連の流れは、基本的に変わらない。他方、実施運営の評価という観点からの実践例は、検索し

た限りでは見当たらなかった。

以上の①から④までの傾向は、見方によっては当然の結果である。教育課程の基準とされる現行の学習指導要領中、小中高の「特別活動」の箇所には、そもそも「評価」の文字がない。新学習指導要領でも同様である。関連して、新学習指導要領の『解説』を参照すると、小中高とも、第1章の総則にある次の一文を掲げ、これをもって特別活動の評価について論じる。すなわち、「児童<sup>6</sup>のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること」<sup>7</sup>と。この総則の記述は特別活動に限らず、教育課程における評価一般について述べた内容であるから、特別活動に特化した運営・実施の振り返りや見直しといった観点がやや希薄なのは、致し方ないところかもしれない。

## 2. チェックリスト法を用いた「特別活動のカリキュラム評価」の提案

2-1 「特別活動の評価」に関する目下の諸課題  
前節の検討から、「特別活動の評価」というテーマはそもそも先行研究ではあまり論じられず、論じられる場合には児童生徒の評定を教育心理学的な手法をもって扱う内容が中心であり、現状では具体的な評価方法を扱った事例に乏しい、という結果を得た。

この現状については、二つの対応があり得るだろう。第一の対応は、なぜこのような状況に至ったのか、その歴史的経緯をさらに掘り下げて検討することである。第二の対応は、この状況を現実的にどう改善すべきか、という検討である。本稿では、後者の第二の対応を中心にとりあげ、前者については別稿を期すこととする。というのは、冒頭に示したとおり、本稿の目的は「特別活動の改善に資する評価方法を開発する」ことにあり、まずは現実的な対応策を提起すべき、と考えるからである。

さて、前節で示した研究の状況は、現在、以下の諸課題を有すると思われる。

①評価目的・対象の転換: 第一の課題は、児童

生徒の評定から、特別活動の運営の改善へと、評価する目的および対象を転換することである。児童生徒を評定した結果は重要ではあるものの、ある活動の運営のよし悪しを吟味する上では、ひとつの指標に過ぎない場合がある。例を挙げれば、ある学校のカリキュラムの意義や価値は、偏差値だけで測れるわけではない。偏差値以外にも、不登校率や満足度、卒業後数十年を経て想起される体験や学校行事、高校であれば中退率等も指標として考えられるはずである。同様に、ある特別活動の価値や意義は、児童生徒の評定だけでは評価しきれない場合がありうる。

②評価主体の転換：第二の課題は、専門家による評価から、実践家による評価へと、評価の主体を特別活動の実践の場により近づけることである。本稿の冒頭で述べた通り、「特別活動の改善に資する評価方法を開発する」ためには、特別活動の当事者である教職員が評価の主体でなければなるまい。評価は、権威ある専門家が複雑な処理を経て、実践家に対して人間ドックのように「通知」する作業だけではない。むしろ評価は、日々の改善、年度ごとの改良に向けて、実践家である教職員が主体的に行い、役立てる作業でもありうる。この分野の現状からみて、実践家による評価の蓄積が急務だろう。

③評価方法の転換：第三の課題は、①②の転換と軌を一にする。すなわち、かつての教育心理学的な測定から、事実の記録ならびに価値判断に重きをおく評価へと、具体的な評価方法そのものを転換する必要がある。かつての「教育評価」は、学習者の知能や測定にかかわることから、教育学者というより、教育心理学者が中心になって確立してきた研究分野だったといえよう。この点、近年議論されている学校評価や教職員評価は、往時の教育心理学的な「教育評価」よりも、事実や判断に基づく「新たな教育評価」を要すると思われる。いわば、教育評価のパラダイム転換である<sup>(8)</sup>。その論点を試みに列挙すれば、量から質へ、専門家から実践家へ、一般化から具体性・固有性へ、反復可能性から一回性へ、あらかじめ定めた規準に照らした確認から結果的に生じた事柄の叙述へ<sup>(9)</sup>、closed

question から opened question へ（根津 2003：175-176）、推計（統計）から事実の記述へ、科学的な厳密さから日常的な素朴さへ、等々を想定できる。そのためには、性格検査や標準テストに代表される測定方法とは異なる評価方法を、新たに提起する必要があるだろう。

④特別活動における評価観の転換：以上をまとめると、特別活動における評価観それ自体を転換させる必要がある、となろう。それゆえ、従来の「特別活動の評価」を相対化し、評価観の転換を明示するために、「特別活動のカリキュラム評価」という語を新たに用いることを提案したい。前に「問題の所在と研究の目的」で述べた通り、カリキュラム評価は児童生徒の評定に終始せず、開発したカリキュラムそれ自体を評価する営為を指す。また、カリキュラム評価と類似する用語として「プログラム評価」(program evaluation)があるが、この語は行政・福祉等の他分野でも用いられ (Smith 1990=訳 2009)、学校教育に特化していない。これらの点から見て、特別活動の分野においては、学校教育になじみ深いカリキュラムを付した「カリキュラム評価」が、より適切であると判断した (森田 2009：284-285)。

## 2-2 「特別活動のカリキュラム評価」のためのチェックリスト法

前項で提案した「特別活動のカリキュラム評価」を実現するには、従来とは評価観を異にする、新たな評価方法の提示が必要不可欠である。本稿では、「特別活動のカリキュラム評価」の具体的な方法として、チェックリスト法 (checklist method) に注目する。まず本項でチェックリスト法について簡単に触れ、次項でチェックリスト法により先に提起した諸課題がどのように克服可能かを検討する。

カリキュラム評価における先行研究によれば、チェックリスト法とは、「複数の評価観点を事前に設けておき、それに従いつつ対象や実践について記述し整理する」(根津 2003：167)という、評価の一方法である。その際に用いられるチェックリストとは、「諸要因、諸特性、諸側

面、諸内容、諸基準、諸課題、または諸次元に関するリストであり、ある特定の課業（task）の遂行にあたり、個別に検討される場所の存在ないし総体」（Scriven 2005：53）を指す。チェックリストの具体例として、表1に、評価研究者 Scriven によるチェックリスト（Scriven 1991：204-210）を参照して開発された、「日本語版カリキュラム評価のためのチェックリスト」（根津 2003）を示す。

表1のチェックリストを用いた先行研究として、3件の実証的な研究がある（根津 2005、今田 2005、浅井 2006）。これらの研究が扱った対象は、工業系高等学校における「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発、中学校の選択科目（技術）における「生活環境に基づく新しい材料教育のための学習プログラム」、総合的な学習の時間において実践された「幼稚園・保育所から高校までのメディアリテラシー教育のカ

リキュラム」と、実に様々である。この汎用性の高さは、「日本語版カリキュラム評価のためのチェックリスト」、およびそのもととなった Scriven によるチェックリストが、いずれも特定のカリキュラムを想定せず、多様な実践の場において実践者が随意に改編して利用できる、という特徴によるだろう。

### 2-3 チェックリスト法による「特別活動の評価」の諸課題の克服

本稿で提案するチェックリスト法は、2-1で述べた「特別活動の評価」に関する目下の諸課題を、次の通り克服しようと目される。

①評価目的・対象の転換：表1に示すとおり、チェックリスト法の各項目（チェックポイント）は、諸実践の諸側面を網羅するための内容が盛り込まれている。表1のもととなった Scriven によるチェックリスト（Scriven 1991：204-210）

表1. 日本語版カリキュラム評価のためのチェックリスト（根津 2003）

1（記述）	評価を行うカリキュラムは、どういうカリキュラムなのか？
2（背景および文脈）	なぜこのカリキュラムを実施しようとしたのか？ また、このカリキュラムにより何が意図されているのか？
3（消費者）	このカリキュラムは、誰に直接はたらきかけるのか？ また、間接的には誰が影響を受けるのか？
4（資源）	このカリキュラムを実施するにあたり、必要を感じているものは何か？
5（価値）	このカリキュラムの目標は何か？
6（過程）	目標を達成するための、カリキュラム上の手続はどのようなものか？
7（結果）	このカリキュラムの結果はどうだったか？ また、それをどのように把握したのか？
8（コスト）	このカリキュラムに、どのくらいお金、時間、人手、会議、場所、手間をかけたのか？
9（比較）	このカリキュラムの替わりになるものはあるのか？ また、他校の実践等と比べてみたか？
10（一般化可能性）	他の学校でこのカリキュラムを実施できると思うか？ またそれはなぜか？
11（意義）	以上の1～10からみて、このカリキュラムは100点満点で何点か？
12（改善点）	どこをなおすともっとよくなると思うか？ また、どこが優れていると思うか？
13（報告の機会）	このカリキュラムはどういうやり方で外部に報告されるのか？
14（メタ評価）	以上の1～13の評価結果を、他に評価する人は誰か？

- 使用法
- ・各チェックポイントとも、短文で回答する。
  - ・判断の根拠としたデータを適宜添付することが望ましい。
  - ・チェックポイント1～10については、各10点満点で点数もあわせてつける。  
その総計をチェックポイント11として加算し、かつコメントを付す。
  - ・チェックポイント1～11までは必須であり、12～14は任意である。

は、そもそも多岐にわたる製品の評価を念頭に置いているため、汎用性が高い。このように、異質かつ多面的なチェックポイントを備えることにより、児童生徒の評定のみに限定されず、幅広い評価対象を設定できると考えられる。

②評価主体の転換：表1のチェックリスト法は、短文で記入する様式をとる。この様式は、三つの含意を有する。一つは、評価の即時性である。すなわち、記入者にとって簡単に利用でき、評価にさほどの時間を要しない。二つめは、評価の簡便さである。すなわち、結果の集計や解釈に際し、統計的な知識や処理を必須の前提としない。三つめは、評価主体の多様性である。すなわち、前二点ともかかわって、必ずしも調査や統計の専門家でなくともチェックリストを利用できる。つまり、専門家に限らず、実践家、ひいては特別活動に参加した児童生徒による記入も可能である。

③評価方法の転換：通常のチェックリストは、「はい」「いいえ」といった closed question 形式のものが多く。この点、表1に示したチェックリストは、「なぜ」「どのように」といった、自由記述 (opened question) の形式を採用した。これにより、closed question では見過ごされがちな、実践家による判断、日常的な事実、種々のエピソードを、容易に記入できよう。この形式は実践の場や内容の多様性を反映しやすく、汎用性が高いと考えられる。領域や内容への特化は、表1のような「原チェックリスト」を各実践の場に適合するよう改編することで対応できる、と考えられるからである。明らかに事例の固有性を指向しており、普遍性を指向する心理学的な尺度構成の手続きとは対照をなす。

④特別活動における評価観の転換：以上の諸点から見て、表1に例示したチェックリスト法を特別活動のカリキュラム評価に導入することで、特別活動における評価観を転換できると見込まれる。ここで対照例として、「学校行事評価システム (SEAS=School Events Analyzing System)」<sup>(10)</sup>を吟味する。SEAS (シーズ) は、大要、次の諸特徴をもつ。すなわち、①学校行事に特化し、国立教育政策研究所による評価規準

に基づき、「アンケート」を用いて生徒 (中学生) の評定を主に行う、②「アンケート」は学校外で集計・分析され、結果が「分析レポート」として学校に伝えられる、③「多角的で客観的なデータを、数値化、グラフ化し継続的に蓄積」する、④開発にあたり、国・私立校のみの試行であり、公立校は含まれない、⑤民間会社と大学との連携による開発であり、民間会社による「販売」が前提とされる。これら五点からみて、SEAS は従来の特別活動の評価観を基本的に踏襲して開発されており、チェックリスト法に比べて評価観の転換はさほど意識されていない、といえよう。

### 3. 結論：「特別活動の評価」の諸課題はチェックリスト法により克服しうる

前節の議論を受け、本稿の結論として表2を提案する。表2は、表1のチェックリストにもとづき、教職員が回答しやすいよう、各チェックポイントの表現を改めたものである。これを、「特別活動のカリキュラム評価」のためのチェックリスト、としたい<sup>(11)</sup>。

表2を提案する根拠として、カリキュラム評価に関する教員研修における筆者の経験を挙げる。ある大学の公開講座 (2008年10月、2009年11月) およびA県の教員研修センターでの研修 (2008年12月、2009年12月) において、ともに筆者は研修講師を務めた。その際、計約180人の現職教員が表2と一部表現を異にする試行版を用い、自らの教育実践を対象としてカリキュラム評価を実施した。対象とする教育実践を限定しなかったところ、学校行事等の特別活動を選んだ教員が少なからず存在した。表2の試行版は、単元や教材の開発といった教科の学習でも利用可能だった。にもかかわらず、意識的に特別活動を評価対象に選んだ教員がいた。この事実は、業務の一環としての研修の場とはいえ、この種の評価方法への潜在的なニーズをうかがわせる。

2009年12月、A県の教員研修センターで試行版を用いた演習形式の研修後、受講者80名に感想や意見を自由記述形式で求めた<sup>(12)</sup>。すると、



表2. 「特別活動のカリキュラム評価」のためのチェックリスト

項 目	概 要	評 点
1 評価しようとする特別活動の実践は、どのようなものですか。		／10
2 どうしてこの実践を行おうとしたのですか。		／10
3 この実践は、誰に直接働きかけるのですか。また、間接的には誰に影響を及ぼしますか。		／10
4 この実践を行う上で、必要な「もの」「こと」(場所や機材、知識等も含む)は何ですか。		／10
5 この実践の目標(ねらい)は何ですか。		／10
6 「5」で示した目標を達成するため、カリキュラム上(学校経営上)、どのような工夫や手続きを行いましたか。		／10
7 この実践の結果はどうでしたか。また、どのような手だてで明らかにしましたか。		／10
8 この実践に、どのくらいお金、時間、人手、会議、場所、手間等をかけましたか。		／10
9 この実践の代替案はありますか。また、他校の実践等と比べてみましたか。		／10
10 他の学校でこの実践を行えると思いますか。また、それはなぜですか。		／10
11 1～10の評点を足すと、何点ですか。		／100
12 この実践はどこをなおすとよくなりますか。また、どこが優れていますか。		
13 この実践は、どのように外部に報告・発信されますか。		
14 以上の1～13の評価結果を、他に評価する人は誰ですか。		

- 使用法
- ・各チェックポイントとも、短文で回答する。
  - ・判断の根拠としたデータを適宜添付することが望ましい。
  - ・チェックポイント1～10については、各10点満点で点数もあわせてつける。
  - ・その総計をチェックポイント11として加算し、かつコメントを付す。
  - ・チェックポイント1～11までは必須であり、12～14は任意である。
  - ・記入日、評価者、感想を記入する。

「演習をやってみて『カリキュラム評価』の大切さを感じた。単元、行事をやり終えるとそこで終わりで評価・改善までいかず日々指導している」、「カリキュラム評価をやってみて自分の中で足りないものはっきりすっきりしないものが見えてきました」という意義や課題に関する記述、「評価を行う際に他者との話し合いのもとに評価を行うと、見えないものが少しずつ見えてくることもある」、「紹介していただいたチェック表は細かく内容が分かれ評定もつけていくと

いうことで、他の職員の先生方との意見の比較ができ、ぜひ学校に戻ってから活用したいと思います」という他の教職員との対話や利用に関する記述、「今回、演習で行ったカリキュラム評価のチェックリストを振り返り実施して楽しかったです」、「カリキュラム評価の手法は様々なイベント企画等で使えそうで、楽しさも覚ええました」、「カリキュラム評価のチェックリスト大変おもしろく、役に立ちそうです」という楽しさ・有用性に関する記述が、それぞれ得られ

た(「」内は原文ママ)。これらの記述がすべて別々の教員からなされたことを考えると、試行版を用いたチェックリスト法は、実践者が楽しみながら有効利用できる可能性がある、と示唆されよう。

次なる課題は、表2のチェックリストを用いた評価実践の蓄積である。あわせて今後は、チェックリストを使用する際の手引書やガイド類の開発、および実践者による試行を経た改訂が、それぞれ求められよう。

## 注

- (1) 本稿は、日本特別活動学会第19回大会(於名古屋学院大学, 2010.8.22)において発表した「『特別活動の評価』に関する課題と方法 ―チェックリスト法の提案―」の内容に、加筆修正を行ったものである。
- (2) この点に関する詳細は、2-1の④で述べる。
- (3) 詳細は割愛するが、この傾向は次の資料にもみられた。文部省(1976)、「現代教育と評価」企画委員会(1984)、千秋(2000)、里見(2002)。今後、歴史的な経緯の検討を要すると目される。
- (4) 総計で約3700件が該当するが、一部重複があるため、概数を示した。
- (5) ここには、「特別活動」の前身である「教科以外の活動」や「特別教育活動」等の評価を扱った記事は、当然含まれていない。これらの評価方法の検討は、稿を改めて論じる必要があるだろう。また、『中等教育資料』誌では、『初等教育資料』よりもさらに記事数が少なかったため、本稿では検討の対象としなかった。
- (6) 中学校・高等学校の『学習指導要領』では、「生徒」となる。
- (7) 『学習指導要領』、『学習指導要領解説』は、次のURLから入手した。[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm) (2010年10月12日確認)
- (8) 1990年代半ばには、既にこの種の議論がなされている。若き認知心理学者の会(1996:249-253)を参照のこと。
- (9) 評価は目標と実態とのズレを確認する作業である、とする考え方は、1970年代以降、価値判

断という評価の本質を損なうとして、痛烈に批判されてきた。この経緯は、根津(2006:69-74)を参照のこと。

- (10) SEASについては、次の資料を参照した。株式会社JTB 法人東京・国立大学法人東京学芸大学(2008)、Yahoo!オンビジネス(2008)、矢内(2009)。
- (11) 表1および表2のチェックリストについて、筆者は、学校関係者による非営利目的に限り、複製・改編を認める。また、論文・著書・報告書・研究発表等で表1および表2のチェックリストないしそれらの改編物を用いる場合は、必ず引用元を明示するよう、お願いしたい。以上の場合、筆者への届出等は原則として不要である。
- (12) 匿名とした。また、論文等での研究利用について明記し、記入者の同意を得て記述を収集した。

## 文献

- 安彦忠彦(1999)「カリキュラムの評価的研究」安彦忠彦編『新版カリキュラム研究入門』勁草書房, pp.181-207.
- 浅井和行(2006)「メディア教育の現場から(33)メディアリテラシー教育開発研究会(4)メディアリテラシー教育の実践と評価」日本視聴覚教育協会編『視聴覚教育』60(7), (705), pp.12-15.
- 千秋一夫(2000)「特別活動の評価」日本特別活動学会編『キーワードで拓く新しい特別活動』東洋館出版社, pp.158-159.
- 「現代教育と評価」企画委員会編(1984)『教科外教育と教育評価』日本標準
- 林尚示・井上有史(2003)「中学校における特別活動の現状と課題」『教育実践学研究』(山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要)8, pp.79-88.
- 林尚示(2003)「近年の特別活動論の流れと教育実践」『日本特別活動学会紀要』11, pp.75-84.
- 今田晃一(2005)『生活環境に基づいた新しい材料教育の構築』神戸大学博士論文, <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/thesis/d1/D1003618.pdf> (2010年10月12日確認)

- 株式会社JT B 法人東京・国立大学法人東京学芸大学 (2008) 「学校行事を分析評価する『学校行事評価システム』SEAS〈シリーズ〉の運用開始」, [http://www.jtbcorp.jp/scripts\\_hd/image\\_view.asp?menu=news&id=00001&news\\_no=921](http://www.jtbcorp.jp/scripts_hd/image_view.asp?menu=news&id=00001&news_no=921) (2010年10月12日確認)
- 宮川八岐 (2002) 「特別活動の指導に生きる評価の考え方」『初等教育資料』749, pp. 38-40.
- 宮川八岐 (2003) 「特別活動における学習指導と評価の充実」『初等教育資料』765, pp. 52-63.
- 宮川八岐 (2004) 「実践的な社会性をはくむ特別活動の展開」『初等教育資料』777, pp. 46-57.
- 文部省 (1976) 『小学校特別活動指導資料 特別活動の評価』
- 森田司郎 (2009) 「民間団体教育プログラムの評価」田中統治・根津朋実編著『カリキュラム評価入門』勁草書房, pp. 284-285.
- 中島保子 (2008) 「社会的実践力を育てる学級活動の研究」『日本特別活動学会紀要』16, pp. 87-96.
- 中村靖 (2002) 「学級活動・児童会活動の評価の工夫」『初等教育資料』749, pp. 41-45.
- 根津朋実 (1999) 「ゴール・フリー評価によるカリキュラムの『意図せざる結果』の解明に関する理論的検討」日本学校教育学会編『学校教育研究』14, pp. 134-147.
- 根津朋実 (2003) 「カリキュラム評価用チェックリストの提案」『埼玉大学紀要教育学部 (教育学)』第52巻第2号, pp. 167-180.
- 根津朋実 (2005) 「チェックリスト法を用いたカリキュラム評価の試み」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』4, pp. 69-82.
- 根津朋実 (2006) 『カリキュラム評価の方法』, 多賀出版
- 里見喜一 (2002) 「特別活動の評価」教職問題研究会編『教科外教育の理論と実践Q & A』ミネルヴァ書房, pp. 150-151.
- 佐藤峰子 (2002) 「クラブ活動・学校行事の評価の工夫」『初等教育資料』749, pp. 46-49.
- 佐藤真 (2004) 「特別活動における教育評価」『日本特別活動学会紀要』12, pp. 33-42.
- Scriven, M. (1972) "Prose and cons about goal-free evaluation", *The Journal of Educational Evaluation*, v3 n4, pp. 1-4. (ED084200)
- Scriven, M (1991) *Evaluation Thesaurus* (4th ed.), Sage.
- Scriven, M (2005) "Checklists", in Mathison, S. (ed.) *Encyclopedia of Evaluation*, Sage, p. 53.
- Smith, M. J (1990) *Program Evaluation in the Human Services*, Springer Publishing Company Inc.=藤江昌嗣監訳, 矢代隆嗣訳 (2009) 『プログラム評価入門』梓出版社
- 杉田洋 (2004) 「評価を指導に生かす特別活動の学習指導」『初等教育資料』787, p. 32.
- 杉田洋 (2005) 「特別活動の評価方法等の開発」『初等教育資料』796, pp. 58-65.
- 滝尚文 (1996) 「小中学校における特別活動実践上の問題点」『日本特別活動学会紀要』5, pp. 91-104.
- 田中統治・根津朋実編著 (2009) 『カリキュラム評価入門』勁草書房
- 若き認知心理学者の会 (1996) 『認知心理学者 教育評価を語る』北大路書房
- Yahoo! オンビジネス (2008) 「JT B 法人東京『学校行事における効果測定共同研究プロジェクト』」, [http://press.onbiz.yahoo.co.jp/pr/ShowPrLeaf/id/C0004014\\_PR000000124](http://press.onbiz.yahoo.co.jp/pr/ShowPrLeaf/id/C0004014_PR000000124) (2010年10月12日確認)
- 矢内忠 (2009) 「特別活動を学校改善に結びつける」『内外教育』5906, pp. 10-11. (2010.10.25)

## Issues and Solutions on Evaluation of Extracurricular Activities (Tokubetsu-Katsudou): A Proposal for a Checklist Method

Tomomi NETSU

The purpose of this study is to propose a checklist method as one measure for curriculum evaluation that differs from the ratings of students by teachers for developing an evaluation method that may contribute to improvements in extracurricular activities in Japan.

First, I briefly reviewed previous Japanese studies on the evaluation of extracurricular activities, mainly referring to articles in the *Journal of The Japanese Association for the Study of Extraclass Activities* and *Shotou-Kyouiku-Shiryou (Information on Primary Education)*, published by MEXT: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) as materials since it was necessary to begin the discussion by examining the discourse published in a specialized academic journal, which indicates the national level of studies and practices, and a typical publication issued by the central government with a significant effect on practices.

As a result of reviewing these studies, I've discovered the following attitudes: (1) the limited discourse mainly addresses the ratings of students by teachers, (2) there is a strong tendency for the student rating pattern, (3) with regard to (2), the measurement in terms of educational psychology is often referred to, and (4) there are few examples of practicing specific evaluations.

Based on the review, I state that the present issues to be addressed about the evaluation of extracurricular activities are the change in the objectives and targets of the evaluation, the change in who should take the initiative for the evaluation, the change in the evaluation method, and the change in the views of the evaluation of extracurricular activities. I then introduce as a specific solution for those issues the checklist method, which is the result of the curriculum evaluation study and explain the adequacy of the method. In conclusion, I propose the checklist I developed as an evaluation tool that specializes in extracurricular activities.